



## 柿本人麻呂献呈挽歌論

|       |                                                                                                     |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-07-29<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 村田, 右富実<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24729/00011092">https://doi.org/10.24729/00011092</a>                   |

# 柿本人麻呂献呈挽歌論

村田 右富実

## 一 はじめに

柿本人麻呂が泊瀬部皇女と忍坂部皇子とにたてまつった献呈挽歌（一九四―一九五）は、その左注から川嶋皇子の薨去に際しての挽歌であることを知りうるものの、題詞に明示的に死者の名を記さない特異な歌である。また、歌われている内容から川嶋皇子には妻がいたと思われ、題詞に名前のあるところからその妻は泊瀬部皇女と目される。本稿はこの点に疑義をさしはさむつもりはないが、いずれにせよ、当該歌の特異性は人麻呂挽歌の中でも際立っているといえよう。そして、その特異性は題詞ばかりでなく、歌の内容にまで及んでいるようである。

柿本朝臣人麻呂献呈泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首

飛ぶ鳥 明日香の川の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に  
流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り 靡かひし 嬬の  
命の たたなづく 柔肌すらを 剣太刀 身に添へ寝ねば  
ぬばたまの 夜床も荒るらむ（一云 荒れなむ） そこ故に  
慰めかねて けだしくも 逢ふやと思ひて（一云 君も逢ふや  
と） 玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に  
衣は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君故（一九四）

## 反歌一首

しきたへの 袖かへし君 玉垂の 越智野過ぎ行く またも  
逢はめやも（一云 越智野に過ぎぬ）（一九五）

右或本曰 葬河嶋皇子越智野之時献泊瀬部皇女歌  
也 日本紀云 朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑浄大参皇

子川嶋薨

## 二 語句をめぐる問題

あるいは、献呈挽歌は人麻呂作歌の中でもっとも解釈に揺れのある歌の一つといつてよいかもしれない。それは基本的な語句の解釈から作歌事情にまでおよぶ広範囲なものであり、それぞれの問題が相互に干渉しあいながら当該歌の印象を不透明なものにしている。

当該歌を論じるには、基本的な語句の解釈の揺れをおさめるところからはじめなくてはなるまい。そして、その該当箇所は長歌第九句（「靡かひし」）から第十六句（「夜床も荒るらむ」）までの八句といつて差し支えなく、その問題点は次のように要約できる。

- ア・「婦の命」は男性か女性か
- イ・「命の」の「の」は主格か所有格か
- ウ・「柔肌」は誰の肌か
- エ・「身に添へ寝」る主体は誰か
- オ・「夜床」は「共寝の床」か「死者の床」か

ただし、アイエは互いに連関しあっており、別個に論じるこ

とはできないと思われるので、従来の説を一括して示しておく（なお、末尾の表も参照されたい）。

- 一・婦の命の柔肌（男性の肌）を（女性が）身に添へ寝ない
- 二・婦の命の柔肌（女性の肌）を（男性が）身に添へ寝ない
- 三・婦の命（男性）が、柔肌（女性の肌）を身に添へ寝ない

さて、順を追って述べてゆくが、まず「つま」は、従来指摘されているように、いわば配偶者という程度の意味であり、妻と夫とのどちらをも指し示す。この点をふまえた上で、岡内弘子氏「『命』考―万葉集を中心に―」（万葉一一〇号／一九八二年六月）は、「『の命』が神にかかわる用法であることを述べ、この「婦の命」を死者である川嶋皇子であるとした。たしかに「『の命』は神にかかわることが多いけれども、死者をそのまま神として扱うのはいかなるものであろうか。また、かりに死者を神と捉えられなくても、その神である川嶋皇子に対して、他には一切敬意表現が用いられていない点に不審が残るといわざるをえない。やはり、「婦の命」その句だけから「つま」の性別を明らかにすることは不可能であるように思われる。ここは作品世界に描かれている「婦の命」を全体的に捉えなければ

なるまい。そこで、「孀の命」の性別の問題は後に触れるとして、順は前後するが、先に「の」の格の問題を考えてみたい。この「の」については、従来所有格に解されていたが、大野保氏「孀の命のたなづく柔膚」(『万葉』二四号／一九五七年七月)が、

「玉藻なすか寄りかく寄り靡かひし」といふ述語(述部)がそれだけで「孀の命」を修飾するのではなく、それと、その上に省略されてゐる主語、すなはちこの献呈歌の対象である泊瀬部皇女を意味する語との合体したものが「孀の命」を修飾してゐるので、いはば

(貴女様ガ)玉藻の如く、彼方へ寄り此方へ寄りして靡き寝た、その夫の君が……

といふことになるのである。(五八頁)

と、主格説を唱えた。しかし、その後、橋本達雄氏「人麻呂作『献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌』の解釈」(『万葉』六四号／一九六七年七月・『万葉宮廷歌人の研究』所収)に、

この部分の叙述は、同じ人麻呂作の「浪のむたか寄りか

く寄り 玉藻なす 寄り寝し妹を」(2—132)と酷似し、この場合と同じく見れば「孀」は泊瀬部ととるのが自然である。また、大野氏が類似した句法としてあげている。<sup>(マ)</sup>同じく人麻呂の

……何しかも わが大君の 立たせば 玉藻のまころ

こやせば 川藻の如く 靡かひし よろしき君の 朝宮を 忘れ給ふや 夕宮を 背き給ふや……(2—196)

の部分には大野氏自身も言っているように「わが大君」が省略されずに挿入されているのである。省略しても明白に主語の判る場合は別だが、誤解を招くおそれのある時には今の一九六番歌のように主語のあるのが妥当であろう。だとすれば、当面歌に主語のないのは、なくてそのまま通じたのであり、むしろ一三一番歌のように解すべきであらうことを思わせていると言えないであらうか。(『万葉宮廷歌人の研究』一四五頁)

と、的確な批判がある。また、宮田持江氏「万葉集卷二194番歌の一考察——『孀の命』について——」(『高知女子大國文』二二一号／一九八五年十月)は、

この「の」については「中略」「―の―を―ば」という構文中で、「―ば」という述部の主語を表す働きをしている用例は一例も見あたらなかった。(四頁)

と、現象面から主格説が成立しないことを指摘する。他にも身崎壽氏「柿本人麻呂献呈挽歌」(『万葉集を学ぶ』第二集/一九七七年十二月)、稲岡耕二氏『万葉集全注 卷第二』(一九八五年)などに主格説の成立しないことについての論があり、主格説の成立はかなり難しいといわざるをえない。

さらにいえば、主格説をとると「柔肌すらを」の「すらを」との関係も難解なものになってしまう。「すらを」は、

このスラの指示する語句とそれを受けるべき述語の意味との間には逆接的な非通常性が成り立つのが常である。それはスラに係助詞ヲを下接したスラヲの形をとるときに著しい。

(『時代別国語大辞典 上代篇』三九四頁)

といわれるように、逆接的な働きをするものであり、当該歌に即していえば、「柔肌」(「スラの指示する語句」と「身に添へ寝ねば」(「それを受けるべき述語の意味」と)の間の「逆接的

な非通常性」が成立するのは、その「柔肌」が生前「靡かひし」もの、つねに「身に添へ寝」るものであったからにほかならない。つまり、「柔肌」の属性を示すものとして「靡かひし」が「柔肌」の連体格として文脈に参画しなければ、その非通常性は成立しないように思われる。「婦の命」の性別はさておき、やはり、「婦の命の」は連体格として下の「柔肌」を修飾していると考えて間違ひなからう。すると、下の「柔肌」が誰の肌であるかを明らかにすることが、とりもなおさず、「婦の命」の性別を決定することになる。

「柔肌」と「身に添へ寝」る主体との問題については、契沖『万葉代匠記』が、

太刀はをのことあるものの身をはなたず、よるもあたりをさけぬものなれば、此集におほくかやうによめり。只身にそへねねばといはんためなり。皇女にあはぬやうにはみるべからず。(『万葉代匠記 初稿本』/『契沖全集 第一巻』五五五頁)

としたように、「柔肌」を男性の肌ととり、その「柔肌」を「身に添へ寝」る主体を女性とする解釈が通説化した(「婦の命」

は必然的に男性をしめすことになる。この通説に対して、西郷信綱氏『万葉私記』（一九五九年／引用は未来社版による）は、

なるほど「劔刀」は「身に添へ」に冠した枕詞にすぎない。だが、そうかといつてことばの意味を抽象し掬いあげるだけでいいとはかぎらない。それは「劔刀身に副ふ妹」（二二・二六三七、一四・三四八五）という風に機能するのであり、「劔刀身に添ふ夫」とはいわないはずである。当然のことながら人麿も采女の死をうたった作で「しきたへの、手枕まきて、劔刀、（采女を）身に副へ寐けむ、若草の、その夫」（二二・二一七）とよんでいる。→中略→笠女郎が家持に贈った「劔刀身に取り添ふと夢に見つ何のしるしぞも君に逢はむため」（四・六〇四）は、必ずしも証歌になるまい。（二四三頁）

と、「身に添へ寝」る主体が男性以外には考えられないことを述べ、間接的に「柔肌」が女性のものであることを主張した。たしかに、斎藤茂吉氏『評釈篇』（引用は『柿本人麿』二／一九八二年による）が、「此辺だけを抽出して味へば、男性が女性に対していふ語気のやうでもある。（六〇五頁）」と、述べる

ように「柔肌」ということばから、男性を連想することはむずかしいであろうし、これについていえば、たとえば、日本後紀（類聚国史・日本紀略による）の延暦十四年条には、

君こそは 忘れたるらめ 柔玉の たわやめ我は 常の白玉

と見え、女性の属性のひとつとして「にき」が認識されていた可能性を示唆する例がある。このように考えるならば、前掲西郷論文は首肯できる卓説ではあるが、「身に添へ寝」る主体を女性とする通説のよりどころである六〇四番歌を手放しに「証歌にはなるまい」とする点に若干の不安を感じる。六〇四番歌を適切に定位することこそが当該歌の解釈の一助になるのではないだろうか。さて、その六〇四番歌は、契沖『万葉代匠記精撰本』が、

太刀ハ男ノ具ナルヲ、女ノ夢ニ身ニ取副ト見ルハ、逢ベキコトワリノ相ナリ。六帖ニ、打麿キ独シ宿レバマス鏡取ト夢ミツ妹ニ逢ムカモ。是又鏡ハ女ノ具ナレバ、今ト表裏シテ意相通ズ。（『万葉代匠記 精撰本』／『契沖全集 第二巻』四〇

と、述べているように、本来的には女性が「身に添ふ」はずのない「剣太刀」を身に添う夢を見ることが「逢ベキコトワリノ相」として歌っている。夢という非現実の世界に起きる特殊な状況が逢瀬の前兆として機能するというのである。つまり、六〇四番歌は、通説の論拠とはならないばかりか、日常では「剣太刀」を「身に添へ」る主体が男性であることを導く例歌といえよう。すると、男性が「身に添へ寝」る「たたなづく柔肌」を男性のそれとする必然性は見当たらず、「婦の命のたたなづく 柔肌」は女性の肌の表現とみて間違いないようである。

では、その「柔肌」を「身に添へ寝」ないことが条件句となつて喚起される「夜床」とは何であろうか。

「夜床」については、従来「古へは、旅行しあとの床をあやまちせじと謹む也」(『万葉考』／『賀茂真淵全集 第一巻』一四九頁)といわれていたが、武田祐吉氏『全註釈』が「薨去した皇子の柩中の寝床を推量して」(五一九頁／引用は『増訂万葉集全註釈』による)とし、これを受けた前掲西郷論文が、石中死人歌(二二〇)の「荒床に ころふす君」を援用しつつ、

私の理解では、「夜床も荒るらむ」はこの「荒床」に、おのずと同一化されるのである。状況のちがいはむろんあるにはあるけれども、「ぬばたまの、夜床も荒るらむ」の句は、死者の荒涼たる寝床を暗示しているというべく、人麿の辞世歌にも「鴨山の岩根し枕けるわれをかも……」(注略)とあるように、死者は荒床に伏すと想像されていた。それを「夜床」といったのは、相寐た夫であるからだ。(二四四頁)

とした。しかし、その後、前掲身崎論文が、

この「夜床」を川島のそれか泊瀬部のそれかとするような問題のたてかたがそもそもおかしいのではなからうか。この語はたんなる夜の寝床というだけでなく男女の共寝するその夜のしとねを指すものと見るべきであろう。(二〇四頁)

としたように、「夜床」を死者の床と見るのは難しいようである。さらに付言するならば、「夜床」は、

ゝはしきよし 妻の命の 衣手の 別れし時よ ぬばたまの  
夜床片さり 朝寝髪 搔きも梳らず(四一〇二)

筑波嶺の さ百合の花の 夜床よどにも かなしけ妹ぞ 昼もかなしけ (四三六九)

衣こそ 二重も良き さ夜床を 並べむ君は 恐きろかも

(紀四七)

とあるように、上代の用例のいずれもが共寝の床を意味する(四三六九番歌は「ゆとこ」であるが、これを含めても問題なからう)。また、「身に添へ寝ねば」が「夜床」の「荒れ」の理由として条件句の機能を果たしていると考えられる以上、やはり『全註釈』の説は成立せず、「夜床」は「共寝の床」と解釈して大過ないと思われる。

以上、解釈に揺れの生じている箇所をみてきたが、この点についてのみえば『全註』の説に落ち着くことになる。すなわち、当該部は「婦の命(女性)の柔肌なのに、(男性は)それを(剣太刀のように)身に添え寝ないので、(共寝の)夜床は荒れていることだろう」と解してよからう。

### 三 話者をめぐる問題 (一)

基本的な語句の解釈の揺れが収まってもなお、当該歌の不透

明な印象を払拭できたわけではない。というのもその不透明さは当該歌の話者の問題に起因する面もまた大きいからである。しかし、当該歌における話者の問題はそれほど古くからとりあげられていたわけではなく、管見に入った限り『万葉集総釈 第一』(一九三五年/当該歌担当は土屋文明氏)に、

此の長短二首は人麿が泊瀬部皇女に代つてその夫君川島皇子を悲しむ情を抒べたもので所謂代作であるが、人麿の力量はよく皇女の心情を汲んで深切に至って居る所がある。(一二二頁)

と、あるのが最初と思われる。この土屋説はあまりかえりみられることはないが、当該歌の読みの可能性を拓いた論として注目に値しよう。その後、この土屋説は語句の解釈に違いはあるものの、山本健吉氏『柿本人麻呂』(一九六二年五月)、阪下圭八氏「人麻呂挽歌の構造」『泊瀬部皇女献歌』をめぐって(『東京経済大学人文自然科学論集十二号/一九六六年二月』)へと受け継がれて行く(なお、末尾の表も参照されたい)。こうした流れの中で、前掲橋本論文が、



この挽歌は、前段を忍坂部が歌い、それをうけて後段を泊瀬部がうたった形となり、ともに亡き河島皇子に自分の立場から歌いかけている形をとっているということになる。(前掲書、一四七頁―一四八頁)

と、当該長歌は「そこゆゑに」によって二分されており、その前後において話者の転換が存在することを述べた。人麻呂歌集歌に長歌の途中で話者の転換する歌(三三〇九)のあることを踏まえ、「献<sup>く</sup>歌」という題詞が私的な性格の強い歌に用いられていることをも含みこんだ上での、この橋本論文の発言は当該歌に新しい豊かな解釈を与えたといつてよからう。その後、この橋本論文を批判的に継承する形で、『注釈万葉集選』(一九七八年十二月・当該歌担当は渡瀬昌忠氏)が一云系統と本文系統とは全く性質の違う歌であり、初案と見られる一云系統<sup>(註)</sup>における話者は泊瀬部皇女に統一されており、それが本文系統に改稿されるにおよび前掲橋本論文の述べる話者転換の存在する歌になったとした。また、曾田友紀子氏「河島皇子挽歌の手法―葬歌との関係から―」(『早稲田大学古代研究』十八号/一九八六年三月)は、前半部が忍坂部皇子から泊瀬部皇女へ、後半部は泊瀬部皇女から忍坂部皇子へ歌われたものだと論じた(身崎壽

氏『宮廷挽歌の世界』一九九四年九月も同)。そして、こうした話者に関する問題は門倉浩氏「『献新田部皇子歌』とその表現主体」(『早稲田大学古代研究』十三号/一九八一年六月・『日本文学研究資料新集』2 万葉集一九八九年所収)が題詞や左注に「献」の文字のある歌について、

創作主体と献歌対象との間接性という情報を題詞・左注から読み取ることが可能であろう。そこから「代作」性という情報も出てくるものと思われる。(『日本文学研究資料新集』2 万葉集「八四頁」)

と述べたように、作品の側から考えなければならない問題であり、

話者が前後半で異なるというのは肯けない。やはり前後半を統一した視点が求められよう。(『万葉集全注』三三二頁)

と、作品の外側から規定することには肯けないものがある。このように、話者転換を認める方向に論が傾きつつある中で、倉持しのぶ氏「人麻呂『献呈挽歌』試論」(美夫君志四九号/

一九九四年十月）は前半部は忍坂部皇子が話者であり、それがなだらかに漸次泊瀬部皇女に変化して行くと述べる。しかし、話者転換は問答体を前提として成立すると思われ（前掲身崎著）、明確な話者の転換点を持たないと考えるのは難しいのではなからうか。

どのような立場に立つにせよ、当該歌における話者の問題は前節において述べた語句をめぐる問題以上に複雑な様相を呈しているといわざるをえない。語句の解釈を中心に据えた話者設定のありようをあらためて考えるべきであろう。

#### 四 話者をめぐる問題（二）

靡く「玉藻」とそれによって喚起される女性の姿態から歌い起す当該長歌の手法は、石見相聞歌（一一三一―一三九）や明日香皇女挽歌（一九六―一九八）の長歌と軌を一にするものであり、人麻呂作歌に特徴的なものである。また、人麻呂作歌における「玉藻」が女性の姿態と強くむすびつくものであることは縷々指摘されているところである。こうした「玉藻」の表現はたして人麻呂の創造にかかるとあるか否かは一概にはいえないが、人麻呂作歌においてのみいえば、それは男性の側か

ら見た女性の姿態であり、男性の側に視座を据えた表現といつて間違ひなからう。勿論、集中には、

さ寝がには 誰とも寝めど 沖つ藻の 靡きし君が 言待つ  
我を（二七八二）

わたつみの 沖つ玉藻の 靡き寝む はや来ませ君 待たば  
苦しも（三〇七九）

などのように、女性が己の靡いたことについて「藻」を使用した例もあるにはある。しかし、これらの例は多分に枕詞的な用い方であり、人麻呂作歌における用法とのあいだには大きな隔たりがあるといえよう。あるいは、この問題は表現の発想基盤にかかわる作者の側の問題であるかもしれないが、冒頭の「玉藻」の表現は前半部の表現が男性の側からなされている可能性が高いことを示唆するものであろう。

そして、この「玉藻」の表現を受ける形で当該長歌中、唯一敬意を含んだ語である「婦の命」が導かれる。既に述べたように「婦の命」は女性と思われるが、その話者についての論は多くない。集中には「婦の命」が二例（当該歌は含まず）あり、

ゝはしきよし 妻の命もゝ中略ゝ夕されば 床打ち払ひ ぬ  
ばたまの 黒髪敷きて いつしかと 嘆かすらむぞゝ(三九  
六二)

ゝはしきよし 妻の命の 衣手の 別れし時よ ぬばたまの  
夜床片去り 朝寝髪 搔きも梳らず 出でて来し 月日数み  
つつ 嘆くらむ 心なぐさにゝ(四一〇一)

いずれも家持の用例であるが、二例とも逢おうにも逢えない妻  
に対して遠くから思いやる表現である。そしてその妻は「床打  
ち払ひ」嘆く妻であり、「夜床片去り」嘆く妻である。この歌  
いは共寝のできないことを条件句として「夜床」の荒れるこ  
とを想像する当該歌と一致する。このことは、集中三例しかな  
い「夜床」を共通の語句として持つ四一〇一番歌が、当該歌の  
影響の下に制作されたことを示していると思われる。いいかえ  
るなら、家持は当該歌前半部を旅にある男の歌と考えていたと  
いうことになるうか。また、記紀の歌にも「婦の命」の句が一  
例見られ、

ゝ頃傾し 汝が泣かさまく 朝雨の 霧に立たむぞ 若草の  
妻の命 事の 語り言も 此をば(記四)

これも集中の例と同様、自分の妻に対して呼びかける例である。  
この歌の表現は実作者による敬語使用の混乱と見ることもでき  
るが、こうした歌が自分の妻に呼びかける歌として通用してい  
たことを考えるべきであろう。以上の用例から帰納するに限っ  
ていえば、「婦の命」は夫が自分の妻に対して用いている二人  
称的な用法ということになる。というよりも、むしろ『時代別  
国語大辞典 上代篇』が指摘するように、「ツマ」という呼称  
そのものが、相手を呼ぶ場合に普通であつたと思われ、菊川恵  
三氏「人麻呂歌集七夕歌の呼称と意義」(『万葉集研究』第二十  
集／一九九四年六月)も指摘するように、遠く逢えない妻に対  
しての呼称として「ツマ」が存在したと考えるのが妥当であろ  
う。そして、当該歌もまたその例外とはならないと思われる。  
また、実際に前半部には全く挽歌的表現が用いられておらず、  
その表現は妻を思う一人の男の口吻でしかないのである。  
このように考えてくると、当該歌前半の叙述は死者である川  
嶋皇子の意を擬えた発話ということにならざるをえない。この  
点について前掲橋本論文は、

死者と生者であるその妻との問答とすることも、想像上あ  
りえないことではなからうが、死者は「朝ごとに御言問はさ

ぬ」(2—1六七) 人であり、「目言も絶え」(2—1九六) 亡者と考えられているので、不自然な感はまぬかれない。(一五〇—一五一頁)

と、その説の可能性を視野に収めながらも否定する。たしかに死者そのものは「目言も絶え」た存在であるが、集中には他ならぬ人麻呂自傷歌群に、

柿本朝臣人麻呂在「石見國臨」死時自傷作歌一首

鴨山の 岩根しまける 我をかも 知らにと妹が 待ちつつ  
あるらむ (二二三)

柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首

今日今日と 我が待つ君は 石川の 貝に(注略) 交じりて  
ありといはずやも (二二四)

ただに逢はば 逢ひかつましじ 石川に 雲立ち渡れ 見つ  
つ悞はむ (二二五)

丹比真人(注略) 擬「柿本朝臣人麻呂之意」報歌一首

荒波に 寄り来る玉を 枕に置き 我ここにありと 誰か告  
げけむ (二二六)

と、死者である人麻呂の意を擬えての歌がある。妻を思ふ人麻呂の自傷歌に対し、妻の答歌ともいべき二首があり、それを受けて丹比真人の報歌がつづく。旅の途次に死に行く夫と家で帰りを待つ妻との間の擬制の問答がここにはある。話者が死者(この場合は人麻呂)に設定されつつも、死者が口をきくというものではなく、あくまでも誰か(この場合は丹比真人)が死者の意を擬えて歌う歌の形があったことが知られよう。

家持が当該歌の「孀の命」の性格を正しく捉えていると考える限り、前半部は死者である川嶋皇子の意を擬えての作ということになる。この点をふまえて前半部を解釈すると、「靡きあったあなたの柔肌なのに、(私は)それを身に添え寝ないので、(私たちの)夜床は荒れていることだろう」となる。これは第二節で述べた語句の解釈と矛盾するものではなく、旅にある男のことばとしても特に突出した点は見出し難い。すると、題詞に忍坂部皇子の名があらわれているのは、あるいは、その意を擬える人間(前例でいえば丹比真人)として忍坂部皇子が措定されているからなのかもしれない。こう考えると、「たたなづく 柔肌」「夜床も荒るらむ」などといった夫婦の機微に触れるような思い切った表現が可能であったことに理解がとどくのではないだろうか。

## 五 話者をめぐる問題 (三)

「夜床も荒るらむ」をうけて「そこ故に 慰めかねて けだしくも 逢ふやと思ひて」と歌は後半部へとはいる。この後半部を前半部同様に川嶋皇子の意を擬えている歌と解釈すると、「逢ふやと思ひて」の部分で文脈は破綻する(特に異伝歌の「君も逢ふやと」においてそれは顕著である)。やはり、前掲橋本論文に詳細に論じられているように、「そこ故に」が話者の転換点として機能していると考えるべきであろう。その上で後半部に絞った形でこれまでの説をかえりみると、泊瀬部皇女をその話者と認めるか否かに大別できる。そして、その論の焦点となるのは、「玉裳はひづち」と「旅寝かもする」との二句である。例えば、伊藤博氏「七夕歌の世界」(『万葉集の表現と方法』上 一九七五年十一月)は、

「かもする」は諸注こぞって認めるように、やはり疑問表現と見るべきであろう。『中略』『かも』の係り結びは疑問表現ときまっている。詠嘆の表現であるなら、ここは『中略』『草枕 旅寝するかも 逢はぬ君故』とうたつたであろう。『中略』

柿本人麻呂献呈挽歌論

なお、ついながら、「朝露に 玉裳はひづち」の「玉裳」も、泊瀬部の呼びかけとときには似つかわしくない。むしろん、「はしきやし逢はぬ君故いたづらにこの川の瀬に玉藻濡らしつ」(二七〇五)というような例もあるにはあるが、こういう例は一つだけで、しかも、この歌の類歌には、「はしきやし逢はぬ子故にいたづらに宇治川の瀬に裳裾濡らしつ」(二四一九)とあり、他の「玉裳」(四〇・一六七・三六一〇・四四五二)はいずれも他人の裳に関して言っているからである。すくなくとも、「旅寝かもする」とのかかわりにおいて見るなら、この「玉裳」は人麻呂から見た美称で、万葉通例の「玉」と同一用法と観すべきであろう。(二〇四一―二〇五頁)

と、この二句をもつて泊瀬部皇女が話者として不適切であることを述べた。

しかし、「玉裳」に関していえば、逢瀬のかなわない男を探し求めて自らの玉裳を濡らすと歌う二七〇五番歌(前掲伊藤論文参照)は当該歌と類想の表現であり、「玉裳」はかならずしも泊瀬部皇女を話者と見ることの障害とはならない。また、「かもする」に関しても前掲倉持論文が「かも寝む」などの用例か

ら詳細に述べているように、逆に泊瀬部皇女が話者であることの証しにさえないかねない。どうやらこの二句のみから話者を決定することは困難なようである。

そこで、後半部全体の皇女の行動や心情の表現についてみると、「慰めかねて」、「逢ふやと思ひて」、「玉裳はひづち」、「衣は濡れて」、「旅寝かもする」といずれも敬語が使用されていることがわかる。後半部に設定されている話者は皇女自身、あるいは皇女にごく親しい人間としか考えられまい。また、その人物は死者である川鳴皇子を「逢はぬ君故」と表現できる人間でなければならぬ。集中の「逢はぬ君（妹・子）」の例は、当該歌を除き十例（三七二・五六二・一九〇二・一九三〇・二四四・二三九五・二四二九・二四七四・二七〇五・二七三〇）見られ、そのすべてが二人称であり、雑歌である三七二番歌を含め（他の九例は相聞歌）、いずれもが相聞的な文脈の中で用いられている。そもそも、前掲伊藤論文に引かれている二四二九・二七〇五番歌や、

行き行きて 逢はぬ妹故 ひさかたの 天の露霜 濡れにけるかも（二三九五 人麻呂歌集）

という歌い方、すなわち、自分の苦しみの原因は思う人に「逢えない」ことにあるのだと断定する表現は、その逢えない対象に向けてのくどきなことばとして機能しているとみるべきではないか。さらにいえば、泊瀬部皇女を話者とする反歌（この点については問題なからう）に目を向けると、「またも逢はめやも」は「逢ふやと思ひて」、「逢はぬ君故」をうけているし、「袖かへし君」は「逢はぬ君」と対応しており、この反歌が後半部と密接な呼応関係を保っていることがわかる。こうした呼応関係は長歌後半と反歌との話者の同一性を示唆する。やはり、後半部の話者は泊瀬部皇女と考えて良いと思われる。

当該歌は川鳴皇子の意を擬える形で家に一人残された妻を思いやる前半部と、それをうける妻の自叙による後半部から構成されていた。旅の夫と家の妻との間の擬制の間答といつてもよからう。では、その後半部はどのような表現内容を持ち具えているのであろうか。

## 六 妻の自叙

夫の死を知った妻は心やりを求めて「玉垂の 越智の大野」へと向かう。この「玉垂の 越智」という連合表現は反歌にも

用いられ、「越智野」の修飾句として特徴的な措辞である。そして、この連合表現は集中ここ以外には見えず、また「越智」にかかる枕詞に「またまつく」(六七四・一三四・二九七三・二八五三)のあることを考慮すると、それが選択的な使用であることは疑いない。「玉垂の」は集中に、

玉垂の 小簾の間通し 一人居て 見るしるしなき 夕月夜  
かも(二〇七三)

玉垂の 小簾のすけきに 入り通ひ来ね たらちねの 母が  
問はさば 風と申さむ(二二六四)

玉垂の 小簾の垂簾を 行きかちに 眠は寝さずとも 君は  
通はせ(二五五六)

の三例を数える。いずれも女の自叙の形をとった、現われない男への歌に用いられている。「玉垂の 越智の大野」は逢えない夫を探し求める妻のことばとして選ぴとられた連合表現といつてよからう。

つづく、「朝露に 玉裳はひづち」の句は、

我妹子が 赤裳の裾の ひづちなむ 今日的小雨に 我さへ

濡れな(一〇九〇)

我妹子が 赤裳ひづちて うゑし田を 刈りて収めむ 倉無  
の浜(二七一〇)

娘子らが 春菜摘ますと 紅の 赤裳の裾の 春雨に  
ほひひづちて(三九六九)

というように女性の美しい容姿を思わせる用例を持つ一方、

泣く涙 こさめに降れば 白たへの 衣ひづちて(二三

〇 志貴皇子挽歌)

こいまろび ひづち泣けども せむすべもなし(四七五

安積皇子挽歌)

臥いまろび ひづち泣けども 飽き足らぬかも(三三二六

某皇子挽歌)

たらちねの 母も妻らも 朝露に 裳の裾ひづち 夕霧に

衣手濡れて(三六九一 雪宅満挽歌)

というように、失ったものへの悲しみの涙や葬儀の儀礼的な所作を背景に持ち合わせた表現であり、この泊瀬部皇女の行動の自叙はそのまま川嶋皇子への偲ひの詞章として機能していると

いえよう。さらに「朝露に 玉裳はひづち」と対句を形成する。「夕霧に 衣は濡れて」は山田孝雄氏『万葉集講義』が、「衣の濡るるは霧のみにあらず涙もあるべし（三八九頁）」と述べるようにこの対句は、単にさまよい歩く皇女の姿を客観的に描写したものではなく、皇女自身の悲しみに裏打ちされた偲ひの表現といってよいだろう。

そして、長歌は「旅寝かもする 逢はぬ君故」と閉じられる。先述のように「逢はぬ君故」は逢えない夫に対するくどき文句であり、後半部は一貫して川嶋皇子に対する偲ひのことばによって構成されていたといえる。

夫を「逢はぬ君」と表現する結句は、女性の自分を「旅寝」へと誘った夫の死の確認であると同時に、「玉裳」を濡らしつつ「旅寝」をする自分への解答でもあった。

## 七 むすび

献呈挽歌は旅立った夫と残された妻との問答という形式の挽歌であった。これまでの諸説も指摘するように当該歌は殯宮挽歌よりも私的な場における公表が制作の前提にあったと思われる。その前提が当該歌に問答形式の長歌という枠組をもたらした

大きな要因として働いていることは間違いなからう。しかし、当該歌以前にも問答形式の長歌や死者の意を擬える形式の歌は存在していたであらうし、そうした点を取りたてて人麻呂の創作とするのはこの本質を見誤ると思う。大切なのは人麻呂が当該歌制作時（持統五年と考えて大過なからう）に、その時々公表の場に適した話者設定を作歌の方法として身に付けていたことなのではなからうか。この話者設定の問題は表現の上に露出している「われ」の問題とも大きくかわると思われるが（拙稿「柿本人麻呂石中死人歌論」女子大文学四五号／一九九四年三月を参照されたい）、この点については稿を改めて論じることとする。

（注） 本稿においては異伝に触れることはしなかったが、その存在は当該歌に複数の発表機会のあったことを示すと考えている。



献呈挽歌における、語句及び話者の問題についての諸説一覧

| 書名／題名      | 成立／発表  | 著者      | ツマノミコト | ニキハゲ | 話者    | 備考         |
|------------|--------|---------|--------|------|-------|------------|
| 1・注釈書等     |        |         |        |      |       |            |
| 万葉集管見      | 一六七三年  | 下河辺長流   | (女)?   | 女    |       |            |
| 万葉集拾穂抄     | 一六八六年  | 北村季吟    | 男      | 女    |       |            |
| 万葉代匠記(初稿本) | 一六八七年  | 契沖      | 男      | 男    | 人麻呂?  | 訓は「いものみこと」 |
| 万葉代匠記(精撰本) | 一六九〇年  | 契沖      | 男      | 男    |       |            |
| 万葉集董蒙抄     | 一七二五年  | 荷田春満・信名 | 男      | 男    |       |            |
| 万葉考        | 一七六〇年  | 賀茂真淵    | (男)    | (男)  |       |            |
| 万葉集略解      | 一七九〇年  | 橘千蔭     | 男      | (男)  |       |            |
| 万葉集櫛の袖     | 一八〇〇年  | 上田秋成    | (女)    | 女    |       |            |
| 万葉集攷證      | 一八二八年  | 岸本由豆流   | (女)    | 女    |       |            |
| 万葉集古義      | 一八三九年  | 鹿持雅澄    | 男      | (男)  | 人麻呂?  |            |
| 万葉集櫛櫛手     | 一八四八年  | 橘守部     | 男      | (男)  | 人麻呂?  |            |
| 万葉集註疏      | 一八六八年頃 | 近藤芳樹    | 男      | (男)  |       |            |
| 万葉集美大君志    | 一九一一年  | 木村正辞    | (女)    | 女    |       |            |
| 口訳万葉集      | 一九一七年  | 折口信大    | 男      | 男    | 人麻呂?  |            |
| 万葉集新考      | 一九二八年  | 井上通泰    | 男      | (男)  |       |            |
| 万葉集全釈      | 一九三〇年  | 鴻巣盛広    | 男      | 男    | 人麻呂?  |            |
| 万葉集講義      | 一九三二年  | 山田孝雄    | 男      | 男    | 人麻呂   |            |
| 万葉集総釈      | 一九三五年  | 土屋文明    | 男      | 男    | 泊瀬部皇女 |            |
| 万葉集評釈      | 一九三五年  | 金子元臣    | 男      | 男    | 人麻呂?  |            |
| 柿本人麻呂評釈篇   | 一九三七年  | 斎藤茂吉    | 男      | 男    | 人麻呂?  |            |
| 万葉集評釈      | 一九四七年  | 窪田空穂    | 男      | 男    | 人麻呂   |            |
| 評釈万葉集      | 一九四八年  | 佐佐木信綱   | 男      | 男    |       |            |
| 万葉集私注      | 一九四九年  | 土屋文明    | 男      | 男    | 泊瀬部皇女 |            |
| 増訂万葉集全註釈   | 一九五一年  | 武田祐吉    | 女      | 女    | 人麻呂?  |            |
| 日本古典全書     | 一九五七年  | 佐伯梅友他   | 男      | 男    |       |            |
| 日本古典文学大系   | 一九五七年  | 高木市之助他  | 男      | 男    | 人麻呂?  |            |
| 万葉集注釈      | 一九五八年  | 澤瀉久孝    | 男      | 男    | 人麻呂?  |            |
| 万葉秀歌鑑賞     | 一九六三年  | 山本健吉    | 男      | 男    | 泊瀬部皇女 |            |
| 日本古典文学全集   | 一九七一年  | 小島憲之他   | 男      | 男    | 人麻呂?  |            |

|                       |          |       |   |    |                        |                       |
|-----------------------|----------|-------|---|----|------------------------|-----------------------|
| 旺文社文庫                 | 一九七四年    | 桜井満   | 男 | 男  | 人麻呂？                   |                       |
| 日本古典集成                | 一九七六年    | 青木生子他 | 男 | 女  | 人麻呂？                   |                       |
| 講談社文庫                 | 一九七八年    | 中西進   | 男 | 女  | 泊瀬部皇女                  |                       |
| 注釈万葉集選（異伝）            | 一九七八年    | 渡瀬昌忠  | 男 | 女  | 泊瀬部皇女                  |                       |
| 注釈万葉集選（本文）            | 一九七八年    | 渡瀬昌忠  | 男 | 女  | 泊瀬部皇女                  |                       |
| 万葉集全注                 | 一九八五年    | 稲岡耕二  | 女 | 女  | 前半（忍坂部→川島、後半（泊瀬部→川島）   |                       |
| 新編日本古典文学全集            | 一九九四年    | 小島憲之他 | 男 | 男  | 葬送の参列の代表である人麻呂         |                       |
| 2・論文                  |          |       |   |    |                        |                       |
| 人麿の献呈挽歌               | 一九五四年十一月 | 吉永登   | 男 | 男  | 人麻呂？                   | 文学                    |
| 姫の命のたたなづく柔膚           | 一九五七年七月  | 大野保   | 男 | 女  | 人麻呂？                   | 万葉                    |
| 人麻呂挽歌の構造              | 一九六六年二月  | 阪下圭八  | 男 | 女  | 泊瀬部皇女                  | 東京経済大学人文自然科学論集        |
| 人麻呂作「歌泊瀬部皇女忍坂部皇子歌」の解釈 | 一九六七年七月  | 橋本達雄  | 女 | 女  | 前半（忍坂部→川島、後半（泊瀬部→川島）   | 万葉                    |
| 七夕歌の世界                | 一九七五年十月  | 伊藤博   | 女 | 女  | 第二者                    | 「万葉集の表現と方法」上          |
| 河島皇子挽歌                | 一九七六年四月  | 土井清民  | 女 | 女  | 泊瀬部皇女                  | 「柿本人麻呂」               |
| 柿本人麻呂献呈挽歌             | 一九七七年十二月 | 身崎壽   | 女 | 女  | 忍坂部皇子→泊瀬部皇女            | 「万葉集を学ぶ」第二集           |
| 人麻呂の表現意図              | 一九八二年六月  | 稲岡耕二  | 女 | 女  | 全国大学文学語学               |                       |
| 「命」考                  | 一九八二年六月  | 岡内弘子  | 男 | 女  | 第三者                    | 万葉                    |
| 人麻呂「献呈挽歌」の論           | 一九八四年三月  | 岡内弘子  | 男 | 女  | 第三者                    | 和歌文学研究                |
| 万葉集卷二194番歌の一考察        | 一九八五年十月  | 宮田持江  | 女 | 女  | 泊瀬部皇女                  | 高知女子大国文               |
| 「泊瀬部皇女献呈挽歌」考          | 一九八六年二月  | 伊藤敦子  | 男 | 女  | 泊瀬部皇女                  | 日本女子大学国文目白            |
| 河島皇子挽歌の手法             | 一九八六年三月  | 曾田友紀子 | 男 | 男  | 前半（忍坂部→泊瀬部、後半（泊瀬部→忍坂部） | 早稲田大学古代研究             |
| 人麻呂の献呈挽歌              | 一九八七年十月  | 高津百合  | 男 | 男  | 泊瀬部皇女                  | 花園大学国文学論究             |
| 人麻呂儀礼歌の作歌主体           | 一九八七年四月  | 曾倉半   | 女 | 女  | 泊瀬部皇女以外の立場             | 国語と国文学                |
| 河島皇子葬歌の構成             | 一九八九年一月  | 上野理   | 男 | 男女 | 葬儀の参列者                 | 早稲田大学大学院文学研究科紀要文学・芸術学 |
| 人麻呂作品における主体の複眼的性格     | 一九九一年五月  | 品田悦一  | 女 | 女  | 第三者                    | 「万葉集研究」第十八集           |
| 「河島皇子挽歌」論             | 一九九四年九月  | 太田豊明  | 男 | 女  | 泊瀬部皇女                  | 早稲田大学古代研究             |
| 「官廷挽歌の世界」             | 一九九四年九月  | 身崎壽   | 女 | 女  | 前半（忍坂部→泊瀬部、後半（泊瀬部→忍坂部） |                       |
| 人麻呂「献呈挽歌」試論           | 一九九四年十月  | 倉持しのぶ | 男 | 女  | 前半から後半、徐々に第三者から泊瀬部変化   | 美夫君志                  |